

大都市におけるキリスト者の使命

——最近の韓国における二つのケースから——

竹 中 正 夫

はじめに

1. ビリー・グラハムのケース
2. ソウルの大衆伝道の特色
3. 朴炯圭牧師のケース
4. 貧民組織運動の特色
5. 二つのケースの比較検討
 - (1) ミッションの空間と時間
 - (2) ミッションにおける宣教と社会的奉仕
 - (3) ミッションの方向
 - (4) ミッションの連帯性

は じ め に

本稿は、最近韓国においておきた二つの劇的なキリスト教会の出来事を取りあげ、その神学的な意味を考究しようとするものである。そのため、約半分のスペースを2つの出来事、ビリー・グラハムの大衆伝道と朴炯圭の住民組織運動の叙述に費やし、後半においてその神学的意義について検討をなした。神学は、主体のおかれている固有な状況の中で、福音に応答するものであり、このような具体的なケースの検討から神学的理解を深め、かつ、聖書の使信をもう一度再把握することが、今日必要とされているように思う¹⁾。

ここで用いられている用語において従来からの用法とちがったものがあるので、あらかじめ、ことわっておく必要がある。それは、ミッションということばである。「ミッション」は従来ミッションナリーが宣教師と訳されてきたこと

もあり、「宣教」と訳されてきた。しかし、それは、そのことばのもつ原意を十分に伝え得ないのみでなく、ある限定された狭いイメージを与えることになりがちである。「宣教」というと教を宣べ伝えるという言葉で、ケリグマの働きをあらわしている。ミッションはたしかにそれを含んでいるが、それだけではない。その上に重要なことは、本来ミッションには、特別の使命をうけて派遣されるという意味がある。ミッションの包括性とその本来的な意味を保つという点から、ここでは、「使命」という言葉を用うことにした²⁾。ミッションとは、神より遣わされ、この世においてフロンティアをこえてキリストによって与えられた使命を果たすことという意味を表現したいと思ったからである³⁾。

1. ビリー・グラハムのケース

1973年5月30日から6月3日にかけて5日間にわたって韓国のソウルにおいてビリー・グラハムの大伝道集會が開かれた。ソウルの飛行場近くの6・15広場に5日間に集まった人々の総計は320万人を越え、最終日の6月3日には、110万人の人々が参集したと伝えられている⁴⁾。おそらくこれは、キリスト教の歴史において最大の伝道集會であるばかりでなく、広い文化の領域における集會としても最大の集會の1つであるに違いない。

ビリー・グラハムは、1918年11月7日北カロライナ州のチャロットにおいて、スコットランド系長老派の牧師の長男として生まれた。フロリダ州の聖書学校 (Florida Bible Institute) とイリノイ州のウイートン・カレッジ (Wheaton College) で学び人類学を専攻した。小さいころの希望は野球の選手となることであったが、1943年大学を卒えたころは、第2次大戦の最中でもあり従軍牧師になることを考えていた。ところが当時、「青年をキリストに」(Youth for Christ) というプログラムを推進していたトリー・ジョンソン (Torrey Johnson) に見出され、シカゴのオーケストラ・ホールで熱弁をふるい大衆伝道説教者としての道を歩むようになった。1944年5月20日、彼の26才のときである⁵⁾。

1948年には、ミネアポリスの北西聖書学院 (Northwestern School) の院長

となり、学院の経営は友人のジョージ・ウイルソンに委ね、自らは専ら大衆伝道にチームと共にあたっている。1949年のロスアンジェルス集会を振り出しに、1950年にはボストン、南カロライナのコロンビアにて大集会を連続して開催した。同年に結成されたビリー・グラハム財団は、ミネアポリスに本部をもち、1970年には、1,500万ドルの年間収入を数えている⁶⁾。

ビリー・グラハムの運動を、アメリカのプロテスタント教会の中で位置づけようとするとなら、つぎの4つの特色をあげることが出来ると思う。

(1) ビリー・グラハムの運動は、ネオ・エヴァンジェリカル (Neo-Evangelical) といわれ、カール・マーキンタイヤー (Carl McIntire) や、ジョン・ライス (John R. Rice) などにみられるファンダメンタリズムと主流をなすネオ・オーソドクス (Neo-Orthodox) との中間に位置づけられる。NAE (National Association of Evangelicals) を組織し、主要教派によって組織されている NCC (National Council of Churches) に対しては、

(2) ビリー・グラハムの運動は都市のプロテスタント諸教会の超教派的協力によって推進され、ビリー・グラハムは現代アメリカの大都市伝道の代表的説教家となっている。前記の NAE に属さない主要な諸教派も大都市の大衆伝道にあたっては、ビリー・グラハムをメイン・スピーカーとするクルセードに協力し参加している。

(3) ビリー・グラハムの運動の第3の特色は、アメリカ中産階層との結びつきである。ビリー・グラハムを受け容れている人々は、アメリカの中産階層の人々である。彼らの多くは白人であり、さして高度の教育をうけておらず、経済的に中流から中流の下に属する人々であり、さして、貧しくはないが、非常に金持でもない。彼らは、勤勉を重んじ、正直であることを誇りとし、法と秩序を尊重している。しかし、このアメリカの中産階層に少なからずの精神的フラストレーションが存在している。

アメリカの中産階層を分析したリチャード・レモンは中産階層の精神的フラストレーションをこうのべている。

「アメリカの中産階層は、勤勉に働くことを尊重して成長してきた。しかし、いまや、数百万の人々が福祉の恩恵を受けて無為徒食しているのみでとまど

っている。また、豊かな社会に生まれ育った若者たちが、労働はナンセンスであるというのをきいて困惑している。彼らは、小さいころから、人々の間で思慮深く振舞うようにしつけられてきたが、今日では多くの人々が汚いことばを警察官にさえ浴びせている。彼らは、公的な道徳律を守るように厳しく育てられてきたが、今日では裸体とセックスの広告を見ずに町を歩けなくなっている。彼らは、子供たちは、親に従うものと教えられてきたが、今日では、親のみならず誰の言うことも聞かなくなっている。彼らは、薬は人間の病気の治癒のためにあるとばかり考えていたが、今日では、マリワナやもっと強力な薬がどこにでも用いられている。彼らは、教会は、選ばれた義人たちの礼拝堂であると思っていたが、いまや、牧師や司祭たちが、彼らにとっては賛成しかねる目的のためにデモをしている。彼らは、国旗は神聖であり、愛国者であることを誇りとしていたが、今日では国旗を焼き、戦争に反対する人々が少なくない⁷⁾。」

これらは、アメリカの中産階層のフラストレーションのリストの一部にすぎない。今日の米国の一般市民の間に存在する不信感は、ウォーターゲート事件によってさらに深められている。すなわち、自分たちの選んだ政治的指導者が信頼出来なくなっている。自分たちが今まで正しいと信じて来た価値の基盤が崩壊し、不安と混乱のなかにおかれている。こうしたアメリカの中産階層の多くはキリスト教の精神によって育成されて来た人々であり、建国いらいのアメリカの精神的伝統を信奉してきている。それは、自由、平等、隣人愛、個人の尊厳といった言葉によってあらわされるものであり、それらは、キリスト教の精神によって支えられてきたものである。ビリー・グラハムは個人の悔い改めが今日の社会問題や政治問題の解決のための前提であると説く。キリストの十字架の下に新生の体験をすることによって、戦争や人種問題やすべての社会問題が解決するという⁸⁾。

ビリー・グラハムは、不安と混乱の中にあるアメリカの中産階層の人々に悔い改めを迫り、彼らが失いかけていたアメリカ社会の理念 (American way of life) への自信を回復させる働きをしている。ビリー・グラハムとそのチームが演出する大衆伝道集会は、個人的敬虔さ (individual piety) と自由主義的人道

主義 (liberal humanism) を支えてきたアメリカの市民宗教 (civil religion) の現代都市における祭典であると言ってもよい。ビリー・グラハムとアメリカの中産階層の理念を結ぶ最もよい例として、彼が1970年、ヴェトナム戦争の最中に、7月4日の独立記念日を、「アメリカの伝統と制度を守る日」(Honor American Day)として集会を企画したことをあげることが出来る。ヴェトナム戦争に対する反対運動と黒人の人権運動によってアメリカ社会にひずみと対立が広がってきたときであった。グラハムは、リーダーズ・ダイジェスト誌の社長ホバート・ルイスとコメディアン、ボブ・ホープと組んでワシントンで大集会を計画した。彼は、ベテロ第一の手紙の2章の17節「王を尊びなさい」を引用し、その日を“Honor American Day”(アメリカを尊ぶ日)と名づけた。彼は、その会合では、参戦と反戦の論戦を避け、みんながアメリカの精神にかえる日としようとよびかけた。ヴェトナム戦争に反対していた青年たちは、この企画に反対し、ヴェトナム戦争を支持していたカール・マーキングタイヤーなどのファンダメンタリスト達は、グラハムたちの計画にあまり賛成でなかった。しかし、アメリカの伝統と制度に立ち帰ろうとするグラハムの呼びかけは、アメリカの中産階層の支持を得た。中産階層は複雑な問題分析より簡単明快な答を要求している。また、彼らは批判的なプロテストより積極的な肯定を求めている。ここに、ビリー・グラハムは、ボブ・ホープのポピラー・エンターテインメントとリーダーズ・ダイジェストに代表されるマス・コミを両翼におき、アメリカの「市民宗教」のメッセンジャーとして中産階層に巾ひろい支持を得ているのである。

(4) ビリー・グラハムの運動の第4の性格として、その国際的影響をあげることが出来る。過去4世紀にわたってキリスト教は、世界的な拡張をなしてきた⁹⁾。そこには、幾多の犠牲的なそして献身的な宣教師たちの働きが存在していたことを忘れることは出来ない。それらの宣教師たちの多くは、西欧のキリスト教国の背景から送り出されており、それらの国々が、政治的植民地支配と経済的搾取をなしていた地域においてミッションの活動がなされていたことも同時に指摘されねばならない¹⁰⁾。過去30年間、いわゆる宣教師運動は、プロテスタントのものであれ、カトリックのものであれ、停滞ないし後退している。

そこには、共産主義の台頭、民族独立にともなうナショナリズムの勃興、そして、反植民地主義などと相まって外国人宣教師の運動は、積極的な反対に逢わぬまでも、あまり歓迎されていないのが現状である。プロテスタント教会は、カトリック教会のように教皇によって国際的一致をもたらすものをもっていない。しかし、カトリックに比べて、プロテスタント教会は、近代の資本主義の発展と密接な関係にある。こうした中で、ビリー・グラハムは、現代の分裂しているプロテスタント勢力を代表し、1つの協力をもたらす中心的シンボルとなる数少ない人物である。彼の大衆集会は、クルセード（十字軍）といわれ、かなりの反共的色彩をもって、アジア、アフリカ、キャラビアン¹¹⁾の諸地域で盛んに行われている。今回のソウルにおけるビリー・グラハムのクルセードもこのような背景から考えてみる必要がある¹²⁾。

2. ソウルの大衆伝道集会の特色

今年5月末から6月3日にかけて行われたソウル市におけるビリー・グラハムの大衆伝道集会はさきあげた一般的な特色にあわせてつぎのような特色もっていたことがあげられる。

第1に、今日のいわゆる世俗化しつつある大都市のなかで100万を越える人々が一堂に会し、キリスト教の集会をもったことは驚異的なことである。勿論、110万の大衆の動員には、世界的伝道説教家、ビリー・グラハムの名声もあったが、韓国のキリスト者たちの一致と協力がなければ、それは果たされなかったことである。前記の6月3日の110万の人々が出席した最終日の統計をみると、2,800人の案内係、15,000人のカウンセラー、6,800人の献金奉仕者たちが参加している。集められた献金は、8,916,256ワン（約5,500,000円）に及んでいる。この外、約10,000人の合唱団が大会には奉仕をなし、連夜約5,000人の人々が集会のための祈祷会に参加している。ビリー・グラハムの説教に中心があるにはちがいないが、現代の大衆社会において、宗教による大衆の動員と組織をなしたきわめて興味深い例の1つである。

第2に、このような100万を越える大集会が今日の韓国の社会状況の下でもたれたことは、大きな意味があると思う。1972年10月いらい韓国では、国会が

解散され、憲法の施行が停止され、朴政権の全般にわたる支配体制が強化されてきた。各種の社会的政治的活動は自由を失い、わずかに宗教の領域が聖域として自由な活動が許されていた¹²⁾。このような状況の中で100万を超えるキリスト者が一堂に会することは、その究極的な忠誠は、国家権力を越えたところにあることを暗黙に物語っており注目すべきものがある。

第3に考えられることは、ビリー・グラハムのような大衆伝道集会に対する国家権力の反応である。いわゆる自由世界に属する国々は、近代国家の重要な要件として、信教の自由をあげている。100万人の大集会は、宗教団体の内部の努力も必要であるが、政府の理解と支持がなくしては到底可能ではない。宗教が精神的な領域に留まっている限り多くの国家はそれを許容する。またさらに、国家は、宗教を積極的に用いることによって、国家目的のために宗教を役立てようとする。わが国の1912年の三教会同にみられるように、神仏基の三教の指導者が政府に招かれ一堂に会し、信教の自由の保証を得た反面、その代償として国家目的のための忠誠を誓うようになったことはその例の1つである。とりわけ、キリスト教は、徹底した唯一神（Radical monotheism）を信奉する普遍的な宗教であり、為政者にとっては扱い難い存在であることは、教会と国家をめぐる歴史的な葛藤をみれば明らかである。この点から考えると、ビリー・グラハムの大衆集会は、宗教が狭い宗教の領域にあって礼拝と儀式をなしている限りは国家権力からは許容され、むしろ、信教の自由の存在の実証として保護されていることをあらわしている。

3. 朴炯圭牧師のケース

ビリー・グラハムの盛大な伝道集会が終わってからしばらくして、6月29日、ソウルの第一長老教会の朴炯圭牧師のほか14人が、武力をもって政府の倒壊を計画したということで検挙された。彼らの大半は、ソウルの貧民街で住民組織をしていた人々と韓国の学生基督者運動のメンバーたちである¹³⁾。

朴牧師は、1923年12月7日に慶南道で生まれた。彼は、釜山大学で哲学を学び、東京神学大学とニューヨークのユニオン神学校において神学の研究をなした。若いときから自主独立と正義を求める気概にとみ、日本の支配下において韓国

の独立のために尽力したため、日本の憲兵によって検束されたことがある。夜学に学ぶ貧しい子供たちの教育にあたりたりしていた。また、東京神学大学に在学中は、在日韓国人教会のために伝道・牧会にあたった。その1つの成果として結成されたのが今日の西新井教会である。

海外での研鑽を終えたのち、朴牧師はソウルの草洞教会と公徳教会の牧師をつとめ、1965年から韓国学生基督教運動の総幹事となり、1968年からは、韓国の基督教の有力な月刊誌である「基督教思想」の編集者となった。1969年、大統領の3期就任を可能にする憲法改正がはかられたとき、その反対運動に参加した。1970年には韓国基督教放送局長として尽力し、1971年には福音信仰の視点から、ソウルの貧しい労働者や住民の人権を守る運動をおこし、1972年にはソウル都市伝道委員会 (Seoul Metropolitan Urban Mission Committee) を結成し、その委員長となり、若い牧師たちや、青年たちと、スラム地域の貧しいそして疎外された人々の解放のために尽力するようになった。

4. 貧民組織運動の特色

1971年ごろから韓国の都市産業伝道は、ますます増加してくる都市の貧民層の実体をとらえ、その人々たちと協力して、住民組織をなし、その生活を守り、また人権を確保する方向をとってきた。きわめて、具体的な方法として、彼らは、ソウルの中心部を流れている清溪川の兩岸のスラム地域を選んだ。清溪川は北の中心部を西から東へと漢江に流れる7.5キロほどの川である。昔はその名前のあるように清らかな溪流であったにちがいないが、いまは、まことに汚いどぶ川となっている。最近ソウル市の道路建設により新しい高速道路がこの川の上につくられた。高速道路が終わったところから貧民窟がはじまっている。彼らは、荷造用の箱板とコール・タールの紙で出来た簡単な家に住んでいる。それを「箱房」または、「板子家」とよんでいる。住民たちの多くは上流の方からやって来た離農民であり、これ以上もう下流には行かれないところまで来てしまった人々である。

ソウルの朴牧師が委員長をつとめている都市伝道委員会は、清溪川の上岸の一定地域を選定して、そこで集中的に働くことを計画した。その地域は43,950

平方メートルの広さがあり、約8,800の家族が存在し、大体66,000人ほどの人々が住んでいる。1世帯の構成は、平均、7.2人で、約60パーセントの住民はきわめて貧しく、35パーセントの人々が経常的な仕事をもっているにすぎなかった。多くの人々は、7人の家族を支えるにあたって約70ワン（約50円）という低い日給でやりくりをしなければならない困窮した状態にあった。そこには飲料水はなく、電気、下水設備もなく、衛生施設も殆んどない地域である。都市伝道委員会から送られた少数のスタッフは、スラムの一隅に住み込み、住民の日常生活に関係のあるごく具体的な問題を見出し、それをきっかけとして、住民の意識をめざめさせると共に、自分たちの中から指導者を選んで、自主的な住民組織をつくり、それを通して彼らの生活の自主的な改善をはかるようにつとめた。

やがて、彼らは、きわめて具体的な2つの問題を見出した。1つは、ソウル市が計画している地下鉄工事であった。市当局は、この3月、地下鉄の車庫をこの地域に設けるため、1,500人の地域の住民に立ち退きを要求した。委員会は、直ちに、住民たちの意見をたずね、立ち退き料を要求する請願運動をおこした。もう1つの課題は、子供の教育の問題であった。その付近には小学校がなく、近所の小学校まで子供たちの足で片道40分もかかった。韓国では、小学校6年までは義務教育となっており、教育費は国家が負担することになっているが、学校の発展のためという名目で「育成費」を父兄から徴収している。本来からいえば、貧しい人々はこれを払わなくてもよいのであるが、彼らは貧しいが故に、育成費が負担出来ないと、子供を学校に送ることをやめてしまう。ここに1つの悪循環がある。経済的貧困は、社会的権利を放棄させ、子供たちは教育を受ける権利を失い、つぎの世代はさらに深い泥沼の中にはまり込んでゆき、彼らをおおう「諦念の雲」はさらに色濃くなってゆく。

「同じ問題に利害関係をもつ人々が集まって、その問題を主体的に解決するように努めよう。」都市伝道のスタッフはこうよびかけ、学校に備え付けてある調書で、育成費すら出せない児童の父兄のカードをつくり、たずねてあるいた。その結果、月450円した育成費が150円にさげられるようになった。

これらの2つの事例は、ごく小さな前進であったが、きわめて具体的な経験

を住民たちに与えた。すなわち、いままでは、日常の問題にあたって、外に対しては、きわめて警戒的であり、疑い深く、内に対しては、劣等感と謙念をもっていた人々に、自分たちが協力することによって、少しずつでも状況をよりよくすることが出来るという自信を植えつけさせたのである。彼らの働きは、単なる社会変革の働きではなく、キリストの福音を信ずるものとして大都市ソウルの貧民窟に、キリストの働きを見出し、それに従おうとしたものである。彼らの文書の一節はその信念をつぎのようにあらわしている。

「ここにキリストはこられる。愛する民の呻く声を胸に痛々しく聞かれるのみならず、その中に来てともに奪われたまま生活したもうのである。キリストに真似た生活をしなければならぬのがわれわれの生の義務である。疎外された民衆を再び疎外してはいけない。ここにわれわれのミッションの目的があり姿勢がある」¹⁴⁾

5. 2つのケースの比較検討

最近韓国で起きたこの2つのケースは、わたしたちが、この世における基督者の使命を考えるにあたって、きわめて重要な示唆とチャレンジを与えている。たしかに、どちらのケースも、基督教のミッションにとって大切な側面を代表している。わたしたちは、簡単に、その一方をとり、他を斥けてはならない。しかし、同時に、多様なミッションの方法があるのであるから、各自が好きな道をとればよいというナイーブな自由放任主義をとることは、きわめて無責任なことである。わたしたちに必要なことは、具体的な状況の中で、聖書の使信に立ち帰って、わたしたちの責任と使命を再把握することである。そうした観点から、この2つのケースの比較検討をなし、キリスト者が現在の大都市にあって果たすべき責任についていくつかの点から考究してみたいと思う。

(1) 使命の空間と時間

1960年代の^{ミッション}使命論において顕著なことは、終末論的な視点から使命を把握し、^{ミッションロジー}ミッションを、神のミッションとして理解することであった¹⁵⁾。ミッションとは、わたしたちの行う働きではなく、神のなしたもう働きに対するわれわれの応答である。神自ら、キリストを派遣した聖霊を遣わし、神の国の業を

なしつづけておられる。そして、それは、終末のときまで継続して行われるものである。このことは、すでに、1952年のウイリンゲンの国際会議において表明されている。

「ミッションとは、個人の回心をのみ意味するのではない。また、主の御言に従うことのみを意味するのでもなく、さらに、教会形成をのみ意味するのではない。それは、独子を派遣された神のミッション (Missio Dei) に参加することであり、それは、すべての被造物の中にキリストの主権を確立する包括的な意味をもっているのである。」¹⁶⁾

ここでは、ミッションは、神のミッションに参加することであり、それは、この歴史のなかで、すべての被造物を対象として行われているものであり、同時に、終末のときの待望のしるしとしてなされるもので、人間の文化的能力や社会的な活動を基としてなされるものではない。

60年代に終末論的な視点からミッションをとらえた書物は、ヨハネス・ブラウの「教会の使命の基盤」である¹⁷⁾。ブラウは、オランダの海外伝道協議会の総幹事をつとめており、その経験から今一度聖書に立ち返ってミッションの意味を再把握しようとした。ブラウがとくに強調している聖書の箇所は、マタイによる福音書24章14節「この御国の福音は、すべての民に対してあかしをするために、全世界に宣べ伝えられるであろう。そして、それから最後が来るのである。」ここには、全世界に福音を宣べ伝えるという使命が、終末論的な時の視点からとらえられている¹⁸⁾。すなわち、神の国が全被造物のなかに成就するまで、神のミッションの働きは続けられ、それは、あらゆる領域においてなされるものである。教会は、神のミッションに参加する使命をもつ共同体であり、神のミッションがこの世のためにあると同様に、教会の使命もこの世のためである。

このように全世界にわたるミッションを終末論的な視点からとらえたことは、ヨハネス・ブラウの功績であるが、さらにそれを歴史的な時間の視点からとらえることが必要であると思う。

従来からのミッション論は、主として空間から考えられてきた。ミッションとは、空間的、地理的フロンティアを越えて福音を宣べ伝えることと理解さ

れていた。初代教会は、エルサレムからユダヤ、サマリア、そして地の果てにまで福音を宣べ伝えることを使命とした。近代のミッシヨナリー運動は、パペルからアフリカに、あるいは、ボストンからインディアンのフロンティアに、そして西部へ、そして、アジアへと地理的なフロンティアを越えて発展してきた。それ故に、ミッシヨンの歴史を記した代表的な作品である K. S. ラトレットの書物のタイトルに、「キリスト教の拡張史」¹⁹⁾ という表現が用いられていることは、従来のミッシヨンの理解が地理的なフロンティアを越えることに強調点がおかれていたことを物語っている。

しかし、聖書は、時間の視点からミッシヨンをとりあげている。それは、2つの時、キリストのときと終末のときの間に行われる働きであり、かつまた、「時のフロンティア」を越える働きである。神がその子を派遣したとき、イエスは、この世のミッシヨンのはじめにつきのように言われた。「時は満ちて、神の国は近づけり、汝ら悔い改めて福音を信ぜよ」(マルコ1ノ14)

ガリラヤのほとりにいた人々は、貧しい人々、病める人々、そして希望を失っていた人々であった。マタイは、「死の蔭に住んでいる人々」(マタイ4ノ16) という表現を用いて彼らをよんでいる。イエスが、自分がメシアであることのしるしとして示されたことは、「盲人は見え、足なえは歩き、らい病人はきよまり、耳しいは聞こえ、死人は生きがえり、貧しい人々は福音を聞かされている」(マタイ11ノ56) ということであつた。ここで注目すべきことは、イエスの到来は、1つの新しい時間の到来を意味していることである。イエスは、神と人との空間的フロンティアを越えられたのみでなく、「古い時」と「新しい時」のフロンティアをのりこえた。ポール・ティリッヒは、イエスのときを、カイロスとよび、永遠が時間の中に介入し時間を変革した特別のときとしてとらえた²⁰⁾。

さきあげた2つのケースにかえてこのことを考えてみよう。ビリー・グラハムのミッシヨンは空間的な面に力をおいていることは事実である。未だ福音を聴いたことのない地域の人々に福音を伝え、回心を迫るということが中心となっている。もっとも、今日の世俗化の状況においては、かつて福音をうけ入れていた人々に対して、福音への再決心を促すということが多い²¹⁾。その場合

は、すでに福音が説かれている空間内で福音をとぎ、キリストに従う決心をおこさせていることになる。

ミッションには、さきにものべたように、フロンティア（前線または境界線）をのり越えるという意味がある。従来のミッションは、いわゆるキリスト教国から異教の国々に地理的フロンティアを越えて派遣されて福音を明らかにする使命をもってなされていた。しかし、最近では、世界は小さい世界となり、「地のはて」は、丸い地球においては、どこでも「地のはて」となった。さらに、世俗化の現象が進むに従って、キリスト教が受け容れられていた国々においてもミッションの働きが必要であることが認められてきた²²⁾。疎外された労働者階級に福音を伝えようとしたフランスの労働司祭の運動は、「フランスはミッションを必要としている」ことを再確認した²³⁾。この場合のミッションは、地理的・空間的なフロンティアを越えることを意味せず、むしろ、同じバリーの中で、経済的にそして、社会的に疎外され、福音に接する機会のない労働者たちの間で共に働き、共に生活することによって、福音を明らかにしようとする試みであった。

朴牧師とその仲間の試みは、フランスの労働司祭のミッションの働きにきわめて近い働きである。それは、同じソウルの市にあって社会的に恵まれた人々や教育のある中産階層の人々に対してではなく、600万の市民の約3分の1、すなわち200万を数える「^{バンザジブ}板子村」に住み、「^{ヘコバン}箱房」の家を住居としている底辺にいる貧しい人たちの間に、キリストのミッションを見出そうとするものである。それは、経済的な、そして、社会的なフロンティアを越えて特別の使命をおびて使わされるされる教会の働きである。

(2) ミッションにおける宣教と社会的奉仕

終末論的なミッションの理解として、しばしば指摘されていることは、福音がのべ伝えられることが、キリスト王国の到来のしるしとされていることである（マタイ24/14）。しかし、見落してならないことは、終末のしるしとして、この世界の政治的分裂と社会的疎外、さらに自然現象の混乱が記されていることである²⁴⁾。

「戦争と戦争のうわさを聞くであろう。……民は民に、国は国に敵対して立ちあがるであろう。またあちこちに、ききんがこ起り、また地震があるであろう。」(マタイ24ノ6,7)

ここでは、全世界(oikumene)は、1つの世界ではなく、分裂した世界となっている。戦争があり、国と国との対立がはげしく続き、人間と自然との疎外がおこり、人々の間が冷たくなり、憎しみと孤立がはげしくなることが示されている。この中にあって、地の果てにまで福音をとくようにという^{ミツクヨシ}使命を基督者は受けている。福音を宣べ伝えることは、終末的状况において基督者に与えられている希望にみちた使命である。何故なら、人間の歴史は、分裂と壊滅に臨しており、そこに暗い雲が蔽っているが、福音は、歴史の未来に神の約束をみ、それ故に未来に向かう希望を人々に与えるからである。

さらに重要なことは、分裂と崩壊、憎しみと疎外のなかにあつて、基督者は、単に希望の福音を宣べ伝えるだけでなく、その状況の中にあつて、終りまで希望をもって彼に従うことを使命として与えられている。福音を宣べ伝えよという使命(14節)の前に、「最後まで耐え忍ぶ」(13節)という表現をもって終末を待望する基督者の姿勢がえがかれている。さらに、イエスは同じ場所で、終末を待望する弟子たちの姿勢について語っている。それは、ある意味では、13節の「最後まで耐え忍ぶ」ということばを具体的に説き明かすものである。それ故に、マタイによる福音書の24章と25章にある、終末についてのイエスのことば(Eschatological discourse)は、そのことばの説明として読まれるべきものであろう。そこにおいて、イエスは終末を迎えるにあつて、2つの時の間で、基督者がいかなる^{ミツクヨシ}命使をもつかを明示している。イエスは、終末を迎えるにあつて、眼をさましているべきことを、ノアの箱船のたとえ(24ノ37—44)や10人の処女のたとえ(25ノ1—13)においてのべたのち、各自に与えられた賜物を十分に用いてキリストに従うべきことをタラントのたとえにおいて示されている(25ノ14—30)。そして、待望の姿勢を示す最後の教えは、「最後の審判」の話であり、これは、この2つの章のクライマックスであり、2つの時の間に生きる基督者の使命の重要な要素となっているものである(25ノ31—46)。この「最後の審判」のたとえは、神の国において、祝福されるものと、

裁かれるものの物語である。そして、祝福されるものは、特定の宗教的団体の役員でもなく、特定の信条を保持したものでもなく、特定の宣教活動に従事したものでもない。彼らは、このいと小さきもの1人に冷やかな水1杯を与えたものである。「わたしの兄弟であるこれらの最も小さい者のひとりにしたのは、すなわち、わたしにしたのである。」(マタイ25ノ40)

ここで明らかなことは、終末を待つ基督者の使命として、福音を地の果てにまで宣べ伝えると共に、このいと小さきものに冷やかな水1杯を与え、疎外されている者を迎え、空腹である者に食物を与え、病める者を見舞い、獄につながれている者を訪ねる奉仕の働きがのべられていることである。福音を受け入れることは古い世界から新しい世界に変革されることであり、それは、死のくさりからの自由と暗黒の支配からの解放へと向かうことを意味しているのである。それは、人間の全存在の新しい方向転換であり、古いときの支配が破れて新しいときの方向に向かうときである。2つのときの間においては、未だそのときは完全に来ていない。まだ、朝は来ていない。しかし、真夜中はすでに過ぎ去り、時は朝に向かいつつある。朴牧師を中心とするソウルの貧しい地域の人々の解放のための働きであって、それは、新しい時の到来を伝える働きであり、「このいと小さき者の1人になしたるは、すなわちわれになしたるなり」(25ノ40)とキリストに祝福される待望の業の1つであった。

ここで、明らかなことは、ミッションとは、福音を言葉で言いあらわす宣教(proclamation)にのみ止まらず、貧しい人々、抑圧の中にある人々、虐げられている人の間にキリストのミッションを見出し、それに参加することを意味しているということである。そして、現代の世界のように、言葉が空虚なスローガンとなり、一方行通の語りかけとなりつつあるとき、貧しい人々の具体的な苦難と連帯性をもたない宣教は、貧しい大衆には、美辞麗句をならべた宣伝とあまり変わらないであろう。巨大な大衆宣伝のパレードには好奇心をもって観覧するが、それが彼らの生活を決定的に変える行動を伴っていないことを彼らはよく知っている。

朴牧師は、ソウルにおけるビリー・グラハムの大会をみて、110万の人々を動員し得たことは、韓国のキリスト者の潜在的な力をあらわしていると評価し

ながらも、貧しいソウルの労働者の身においてこの大会をみてつぎのように述べている。

「伝道大会の意義は、このような機会に、キリスト教を知らない人びとがキリストに会い、キリストを主として受け入れ、新しい生を生きるようにされることにある。……夕べ毎に数万名の決心者があったということをわれわれは知っている。しかしこのような大会をもっても、全くそこに来ることのできない数多くの人びとがあるということを忘れてはならない。

工場で汗を流しつつ機械と競争している工員たち、食堂で、喫茶店で、商店で、こまねずみのようにくるくる立ち働いている店員たち、がけ下のバラックに病みつかれた身体を横たえて、どうすれば次の食事ができるかと心配している人たち、荒廃した農村や漁村で土地と海ののろいを一身に引きかぶって、死ぬこともできず、生きて行く人びと、人間と生まれながら富める家の犬や猫の身の上をうらやみつつ生きねばならない数多くの人びとには、五・一六広場の伝道大会は、行こうが行くまいが、知らしてくれる人もなければ、知る必要もないことなのである²⁵⁾。」

ソウルの人口の3分の1を数える貧民窟にいる人々にとってピリー・グラハムの大伝道集会は対岸の花火に等しかった。それは、華やかに空中から流される飛行機の吹き流しの宣伝幕のようなものであった。そこで、いわれていることは、結構なことであっても、彼らの日常生活に具体的にくいこみ、それを変革してゆくものではなかった。

このことは、H・クレーマーが指摘したように、コミュニケーションの手段の問題に限られていない。クレーマーは、福音の伝達にあたって、伝達しようとするメッセージの内容を伝えるためには、伝達する者と、きくものとの間にコミュニケーションが成立していなければならないことを指摘した²⁶⁾。彼は、メッセージの内容を《communication of》とよび、伝達する者とその相手との関係を《communication between》とよんで、前者が達成される前提として、後者が不可欠であることを説いている。

朴牧師は、教会が持てる者、権力をもつ者の側に立つ教会となりつつある今日の現状を鋭く指摘し、こういつている。

「持てる者の階級に属してしまつた教会は持たざる大衆との接触点を失つてしまつた。教会は大衆の言葉を理解できず、彼らの感情をうかがい知ることができず、また彼らのなげきを見聞きすることができないのである。エジプトで苦しんだイスラエルのうめき声が、わが教会に聞こえてこない。ドロボウに出くわした人が死んでゆく姿を見ても、自分たちの宗教的義務をとり行うためにかたわらを通り過ぎてしまつた祭司とレビ人のように、韓国教会は血と汗を流し飢えかわき、たおれてゆく勤労大衆の横に近寄ろうとはしないのである」²⁷⁾。

朴牧師は、決して大衆に対する宣教活動に反対していない。彼は、「教会は、キリストの体として、今日の情況で神と共に宣教すべく召しを受けている」とのべている²⁸⁾。教会は、イエスと共に貧しい人々、虐げられている人たち、病める人たち、獄につながれている人たちと共にあり、彼らの1人となり、共に死によみがえる生を選び取るように召しを受けている。このことを前提にせずしてキリスト教の宣教はあり得ないというのが朴牧師の主張である。

これは、前述のようにメッセージの伝達の方法についての問題を提起しているのみでなく、伝達すべき、メッセージの内容の理解について重要な問題を提起している。

ビリー・グラハムのミッションにおいては、個人の精神的回心が第1の前提となっており、社会的な責任はそれに付随しておきる第2の行為とされている。彼はその説教において、基督者は隣人を愛すべきことをのべ、平和、平等、兄弟愛のために努力すべきことをのべている²⁹⁾。そこにおける救いの理解は、個人的なそして内的な罪からのゆるしが中心となっている。個人が回心すれば、その必然的結果として社会がよくなるという見解がそこにある³⁰⁾。前述のアメリカの中産階層とビリー・グラハムが結びつく理由はここにある。すなわち、アメリカの中産階層にとって重要な価値は、個人的な自由 (private freedom) であり、物質的成功 (material success) である。ビリー・グラハムのメッセージは、福音の内面的精神化 (inward spiritualization) と、倫理の私的個人化 (private individualization) をもたらし、アメリカの中産階層のもつ既成の倫理的欲求に適合している。さらに、ビリー・グラハムがアメリカの歴代の大統領

領と緊密な関係をもち、とくにニクソンの政権にあたっては、ホワイト・ハウスのチャブレンのように精神的影響を与えていることをみると、私的な宗教的・精神的領域から公的な政治的・社会的領域にそれなりの支持と参与をしていることが明瞭である³¹⁾。

これに対して、朴牧師を中心とするミッションのアプローチは、福音をはじめから公共の出来事 (the public event) として理解する。

「宣教は神がなされる業であるので、誰もその対象から除外されることはない。主なる神はイスラエルの民がエジプトに降り、神の名前を忘れるほどに無神論的な民になり下がったが、しかし神は彼らを捨てたまわず、彼らを救い出さんがためにモーセと共にエジプトに赴かれたのである」³²⁾。

出エジプトの出来事にみられる神の救いは、単に狭い精神的な回心にとどまらず、イスラエル民族の解放という、精神的・社会的・政治的実体のなかで、遂行されている。神のミッションは、異教徒に対して、口頭で福音の真理をのべ、精神的回心を迫る働きよりももっと広い、包括的な内容をもっている。それは、この世のすべての領域において、彼の御国を成就させる働きであり、それは、その独子を遣わして、人間の具体的な苦しみや痛みを共にする神の働きを通してなされた。独子にみられる神のミッションは子に対する父の非私有化 (de-privatization) である。

「今日における救い」をテーマとして開かれたバンコックのWCCの会議は、救いの包括的な理解をのべ、神の救いは、つぎの4つの次元において働いていることを指摘している。

- 「(1)人間相互間の経済的搾取に対して、正義を回復しようとするたたかいの中に、救いは働いている。
- (2)他者に対する人間の政治的圧迫に対して人間の尊厳を回復するたたかいの中に救いは働いている。
- (3)人間相互間の疎外に対して、連帯性を回復しようとするたたかいの中に、救いは働いている。
- (4)人間の非人間的な生活の中にある絶望に対して希望をもたらすたたかいの中に救いは働いている」³³⁾。

救いは、神によってなされている動的な出来事であり、これらの4つの次元におけるプロセスにおいて展開されている。われわれは、ミッションを考えるときにも、その方法のみでなく、その内容において、包括的な理解をもつ必要がある。

(3) ミッションの方向

ビリー・グラハムの大衆伝道も、朴牧師らによる都市の貧民層の間における働きも、共に宗教的な動機から出発した運動である。それは、現代社会の中における宗教運動である。ここでミッションの方向として両者を比較検討してみたいのは、宗教運動として、その組織形態においていかなる方向性をもっているかということである。両者とも、大都市において、大衆を動員する点に関心をもっていることは共通している。しかし、その構成員が運動体においてとる方向において相異点があると思う。

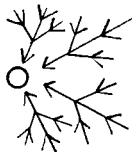
ビリー・グラハムの場合、宗教運動の目標は大衆を動員し、ビリー・グラハムの伝道集会に参加させるという方向をとる。その成果は、何人その集会に参加したかということ、そして、何人決心者があったかということによってはかれる。運動に参加するスタッフの人々も、聖歌隊も、アッシャーも、カウンセラーもみなグラハムの大集会の成功へとむけられる。それは、この世の具体的状況から宗教的大集会へという方向をとる。極言すれば、スタッフは花形役者であり、英雄的スター・プリーチャー（説教者）、ビリー・グラハムの手足としての役割を果たし、大集会へと人々を動員し、決心を促すという方向をとる。

これに対して、朴牧師などになってなされている都市産業ミッション(UIM)の方向は、全くその逆の方向をとる。人々を朴牧師の説教をきくために集めるのではなく、朴牧師は委員会を組織し、スタッフを訓練し、励まし、経済的な支援態勢をつくって、ソウルの貧民の住む地域に遣わす。彼らは、そこにおける疎外された大衆の中に共に住み、そのよろこびと悲しみを共にすることによって人間回復の運動を共におこそうとするものである。運動の方向は、この世から宗教的集会へという方向ではなく、宗教的動機からこの世における運動へという方向をとってくる。成果の基準も何人、宗教的集会に集め得たかという

ことではなく、この世の貧しい人々、虐げられた人々の間におけるキリストのミッションにどれだけ具体的に参加出来たかという点にかかっている。

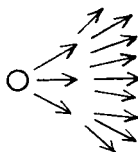
ビリー・グラハム

現実の世界からのミッション
(Mission out of the world)



UIM

現実の世界へのミッション
(Mission in the midst of the world)



いわゆる世俗化しつつある大都市においては、1人1人の構成員は、巨大な力の下に自分の能力の限界を知らされ、お互い同志の孤立感をもっている。そこに、大衆的な巨大な集会の意義がある。無力感をもった現代人に、自分はこの集団に属し、この集団と一体であるという自己確認 (self-identity) を与える。ファシズムや、全体主義社会における巨大なマス・ミーティングはそうした機能をもっているし、わが国の創価学会などにみられる新興宗教の大集会は同じような機能を果たしている。われわれは、一概に大衆的集会の意義を否定するものではない。しかし、そこでよく吟味されるべきことは、大衆の動員の方向はどのような方向を向いているかということであり、もう一つは、その大衆集会で語られることが、どれだけ現実の大衆の苦難と結びついているかということである。

この点からいうと、同じキリスト教による大衆の集会であっても、戦後ドイツで試みられたキルヘン・タークの会合は積極的な意味があると思う。そこでは、日常の社会生活において問題となっている課題があらかじめあげられ、長い間の準備ののち、大集会がもたれ、そこで普段は離散している基督者が互いに励ましあい、共同の指針にふれて、再びこの世の持ち場へと遣わされてゆくというリズムがあるからである³⁴⁾。

(4) ミッションの連帯性

われわれは、ビリー・グラハムの大衆伝道と朴牧師を中心とする都市の貧民層への働きを比較検討してきた。われわれは、これらを第三者の立場からみて客観化して評論し、あたかも対岸のこのように対象化してはならない。というのは、今日におけるミッションは、きわめて狭い、しかし分裂した世界の中で、人類の連帯性の課題を負ってなされている共同の使命であるからである。

ビリー・グラハムのケースにおいては、国際的な連帯性は、ソウルの伝道集会を盛んにするために、財的な面からまた報道通信の点から強力になされたことは言うまでもない。また、ソウル大会の主な様子は映画に取められ、アメリカの主要なテレビのネット・ワークを通して全米に報道され、その運動に対する支持をアピールしている。一方、朴牧師などが、6月末に検挙されたことにより、国際的な基督教会の関心は自発的にたかまり、韓国の諸教会への問安のチームが8月はじめには組織され、また、激励のカンパや祈りが世界の各地から寄せられている。

ここで重要なことは、都市の労働者の疎外状況は、その国の問題であると同時に、国際的な経済関係の影響を多分に受けているということである。どの国の指導者も、自国の市民が豊かになることをねがっている。そのようなスローガンをつくり、そのような演説をなしている。しかし、実際のところ開発途上の国々の多くは、今暫くの間は、先進諸国に追いつき、開発の端緒につくまでは、一般大衆は忍耐強く労働し、貧乏を辛抱しなければならないと説く。そうした指導者の1人はこういっている。「搾取は望ましいことではないが、開発のためには不可欠である」と。このことは、搾取を正当化し、経済的開発が多少でも進んだとしても、その果実の多くを社会的・経済的に持てる層が取ってしまい、底辺の貧困層はいつまでも貧しい状態に留まることになる。たしかに、勤勉、正直、蓄積などの個人の日常生活への内的な態度は、経済の発展に大きな影響を及ぼすものである。しかし、そのことは、経済的搾取を正当化するものであってはならない。

開発途上の国々の悩みは、その国内部の問題に限られず、国際的な経済関係

に密接に依存している。多くの開発途上の国々は、開発に必要な資本を必要としている。外国資本を誘致するためには、安い労働力のあることと、安定した社会秩序が必要条件である。そこから、低賃金で長時間の労働が必要となり、劣悪な労働条件に対するプロテストは禁じられ、労働組合の活動さえもが制限されている³⁵⁾。外国資本の側では、その国の資本と提携し、多国籍の企業をつくり経営を行うので、その国を援助している形をとっているが、実際に利益を受けているのは、その国の社会的・経済的支配層であって、労働者階級は貧困と搾取の中におかれている。

日本と韓国の経済関係についてこのことをみると、貿易額は、1972年度は、16億3,000万円にのぼり、1973年度は、1月から7月までですでに14億円を越えている。また企業進出は、1973年6月までで、416件（約3億300万ドル）にのぼっているが、そのうち、126件（約1億5,800万ドル）は、過去6カ月になされたもので、最近の進出度のめざましさを物語っている。

こうした日韓の経済関係は、1965年の日韓基本条約からはじまり、そこでは、政府借款、無償3億ドル、有償2億ドルがなされるようになり、1970年から米国が対韓無償援助を打ち切ったからは、肩がわりに、日本政府の対韓援助は増大し、製鉄、機械工業、そしてソウル市の地下鉄事業、さらに農村の近代化をめざすセルウル事業などに援助がなされている。民間投資は、はじめに、中小企業を中心としていたが、最近では重化学工業の進出がめざましくなってきた。とくに、本年5月、韓国政府は、向こう10年間にわたる400億ドルを投資して重化学工業の開発計画を発表し、国際水準に達することを目標としているが、そのうち、約100億ドル分は日本からの投資を期待している。すでに造船、鉄鋼、電気、自動車などの大手企業9社が、これに応ずるようになっているということである。韓国の経済は、1963年ごろより、上昇のきざしをみせ、67年から71年度まで平均11.4パーセントというかなり高い成長率をとげているが、労働者の賃金は低く、その労働条件は劣悪であり、それに対し問題を指摘し、批判や改善をはかることは制約されている状態にある³⁶⁾。

日本の企業進出が進んでいる理由として、つぎの諸点があげられている。

1. 低賃金（労賃は日本の約3分の1）で軍事政権下で労働争議がないこと。

2. 日本国内では、人手不足に加えて、公害問題のため立地条件がきわめて困難になってきていること。
3. 円の切り上げにより海外投資が容易となってきたこと。
4. 日中復交がなされ、対韓投資を牽制していた要素が消滅したこと。
5. 日本商品の締め出しや、輸入制限対策として、日本企業の多国籍化が緊急の課題となっていること。

このような状況のなかで、韓国の「経済的開発」がおこなわれている。さらに、具体的な個々の企業の労働者の実態についてのデータをあげることが必要であるが、労働者階級が貧困と抑圧の中にあることは蔽うべくもない事実である³⁷⁾。

朴牧師を中心とするソウルの貧民地域への働きは、このような背景から理解されねばならない。彼らは、貧しさと、抑圧の中に、無力な自らを見出し、明日に生きる希望を失って、その日その日の流れに、浮き草のように流されている人々の間に、キリストのミッションを確信し、それに参加しようとしたのであった。それは、夜がすぎざり、朝がくることのおとずれであり、死の蔭の谷に住む人が、生命を見出すときの到来をもたらす働きであった。そして、そのミッションの場は、今日の相互依存関係にある世界においては、密接な関係にあり、国際的な連帯と、共同の責任を要請しているのである。エキュメニカルということばは、単に教会相互の教派的協力関係をあらわすものではない。それは、本来、「人々が住んでいる全世界」をあらわしていることばである。このことを理解するなら、エキュメニカル・ミッションは今日の分裂した世界において、時間と空間のフロントに生きるものとなるであろう。

注

- 1) このような試みをなしたものとしてつぎの文献をあげることが出来る。EACC, *Theology in Action*, 1972, David Jenkins, "Concerning Theological Reflection", *Study Encounter*, Vol. VII, No. 3, 1971, John J. Vincent, "Doing Theology today", *Study Encounter*, Vol. IX No. 2, 1973.
- 2) 1960年、世界学生基督教連盟 (WSCF) が *Life and Mission of Church* についての研究プログラムを推進したとき、これは「教会の生命と使命」と訳されたことがある。

- 3) ミッションを神の派遣として把握した神学的表現は *Missio Dei* ということばで、これを最初に用いたのは、オランダのライデン大学の Karl Hertenstein であり、G. Vicedom の *Missio Dei*, München, Chr. Kaiser, 1958. によって一般に知られるようになった。
- 4) 「韓国基督教新聞」1973年6月9日号
- 5) Lowell D. Streiker and Gerald S. Strober, *Religion and the New Majority*, Billy Graham, Middle America, and the Politics of the 70s, 1972, p. 29.
- 6) 同上書, p. 33.
- 7) 同上書, Richard Lemon, *The Troubled Majority*, 1970, pp. 46-47.
- 8) Billy Graham, *World Aflame*, 1965, pp. 70ff.
- 9) ラトレットはミッションの歴史を地理的拡張の歴史としてとらえた。K. S. Latourette, *A History of the Expansion of Christianity, 1937-1945*, 7vols.
- 10) 西欧の政治的経済的拡張の背景において宣教師運動をとらえたものとして、K. M. Panikker, *Asia and Western Dominance*, 1959. また、小山晃助氏のつぎの小論文も注文すべき視点を提供している。Kosuke Koyama; “Gun” and “Ointment” in Asia, *The Future of the Christian World Mission*, Studies in honor of R. Pierce Beaver, edited by William J. Danker and Wi Jo Kang, 1971, pp. 43-55.
- 11) 1958年に Billy Gram Evangelical Association は日本、インド、アフリカに宣教師を送る用意のあることを発表し、1950年から “Decision” (決断) という名のラジオ放送番組をスペイン語で毎週20の放送局から放送し、1959年からは *World Evangelism* という雑誌を出版している。
- 12) 「毎日新聞」1973年7月7日
- 13) 学生たちは20日間ほど検束され釈放されたが、朴牧師他三人はひきつづいて拘束され8月末から公判が開かれ、9月24日徴役2年の判決がなされた。
- 14) 「福音と世界」1973年7月号、韓国教会レポートより。
- 15) Johannes Aagaard, *Trends in Missionological Thinking During the Sixties*, *International Review of Mission*, January 1973.
- 16) W. Freytag, (ed.) “Theologische Besinnungen”, p. 54, in *Mission zwischen Gestern und Morgen, von Gestaltwandel der Weltmission der Christenheit im Licht der Konferenz der Internationalen Missionrates im Willingen*, 1952.
- 17) Johannes Blauw, *The Missionary Nature of the Church, A survey of the Biblical theology of mission*, 1962.
- 18) Johannes Blauw. *The Missionary Nature of the Church, A survey of the Biblical theology of mission*, 1962, 106ff.

- 19) Kenneth Scott Latourette, *A History of the Expansion of Christianity, 1937-1945*, 7 Vols.
- 20) モルトマンの「希望の神学」に発想的契機を与えた E. ブロホは時間の地平線において「新しいこと」(Novum) が生起するときを前線 (Front) とよんでいる。そこにおいては古い時の殻が破れ、新しい時が生出する地平線 (Horizont) のときである。Ernst Bloch, *Das Prinzip Hoffnung* 1959, S. 227-235.
- 21) ビリー・グラハムのクルセードの詳細な調査を北カロライナ州のグリースボロ市でなしたことがあったが、それによると約90%の“決心者”は既にどこかの教会に属している人々であった。James L. McAllister, *Evangelical Faith and Billy Graham, Social Action*, March 1953.
- 22) 1963年にメキシコ市で開かれたWCC の会議は“mission in the six continents” (6大洲におけるミッション) を強調した。
- 23) ‘France, pays de Mission’; by Abbe Godin and Abbe Daniel, in the *Woker-Priests-A Collective Documentation*, 1956, p. 196.
- 24) Philip Potter, ‘Christ’s Mission and Ours In Today’s Word,’ *International Review of Mission*, April, 1973, p. 145.
- 25) 朴炯圭「疎外された大衆と教会の宣教」I, キリスト新聞, 1973年8月4日。
- 26) Hendrik Kraemer, *The Communication of the Christian Faith*, 1956, p. 22.
- 27) 朴炯圭「疎外された大衆と教会の宣教」II, キリスト新聞, 1973年8月11日。
- 28) 同上, 論文。
- 29) Lowell D. Streiker and Gerald S. Stober, *Religion and the New Majority. Biddle Graham, Middle America*, 1972, p. 44.
- 30) ビリー・グラハムは戦争を排し平和をとき、人種的偏見を批判し人間の平等と自由をといている。しかし、それらは個人的倫理であり、米国のベトナム戦争という政治的出来事を批判しているものではない。また、人種の問題にしても、人類の平等をとくが、米国の人種的偏見が社会的政治的な制度として存在しているにもかかわらず、個人的にクルセードに黒人を迎えたチームで行なうといった受けとめ方をしている。
- 31) William G. McLoughlin, Jr., *Billy Graham, Revivalist in a secular age*, 1960. 酒井俊雄「ニクソン体制におけるビリー・グラハムの役割は？」福音と世界, 1973年8月号。
- 32) 朴炯圭「疎外された大衆と教会の宣教, II」キリスト新聞, 1973年8月11日。
- 33) *International Review of Mission, Meeting in Bangkok*, April, 1973. p. 200
- 34) Kirchentagの運動については, *World Council of Churches, Meet the Church, the growth of Kirchentag idea in Europe*, 1959. 参照。
- 35) このような例は、韓国のみならず、シンガポール、タイ、フィリピン、インドネ

シアなどにおいて共通している。

- 36) Humanizing Industrial Relations, *Church Labor Letter*, No. 125, July, 1971.
- 37) 筆者が接した時の某進出企業の駐在員の報告によると、その会社は日本の中小企業で韓国の南の地方の中都市に工場を設け、多国籍企業として運営している。約300人の労働者が農村地帯から雇われ、その大部分は年若い女子労働者であり、月給は約5000円で成長ざかりの彼女たちが一日二食であるので、何とかして寮をつくって一日三食たべられるようにしたいと語っていた。因みにその工場を運営している韓国人は、かつては一介の農民であったが、現在では富豪となり、龐大な資産をもつ金持となっているということである。

(本学神学部教授)